

葛飾区史編さんだより

270611

Vol.15

総務部 総務課 区史編さん担当係 03-5654-8444
郷土と天文の博物館 03-3838-1101

葛飾区



平成 27 年 1 月 24 日(土)午後 2 時から、東立石地区センターにて「昭和の葛飾を伺う会」が開催されました。多くの方にご参加いただき、東立石にまつわる様々なお話を伺うことができました。



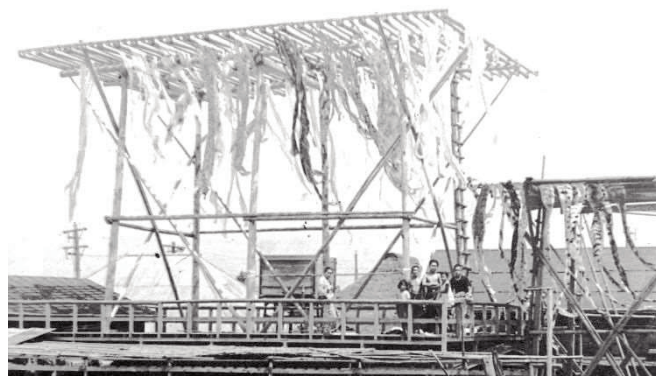
染色工業

昭和 30 年代は東立石(原・川端)に多かった染色業の全盛期でした。東京型友禅と言って、渋い色の仕上がりに定評がありました。国旗、はんてん、風呂敷などがおもな製品でした。京都や金沢の友禅染は「手描き友禅」なのに対して、型紙を使って色を置いていく方式がこの地域の染色業の特徴でした。

型は柿渋で和紙を固めた伊勢型紙を使ったものや、スクリーン染色という方式などがありました。型を使って生地に染料と防染糊を置き、定着させたものを糊落としします。このときに多くの業者が中川の水で落としました。

台船と呼ばれる船を中川に浮かべ、反物を水洗いします。川は流れがあるので防染糊を洗い落とすために非常に都合がよかったようです。のちに廃棄物の規制がきびしくなったあとも出来るだけ川を使いたいという人が多かったそうです。糊が落ちるとそれを食べようとする魚が台船の周りによってきました。昭和 39 年(1964)の東京オリンピックのときには万国旗の注文が多くなりたいへん忙しかったそうです。

東立石の染色業は大正 8 年(1919)宮本染色工業が原で創業し、同じ頃川端で浪川染色、加藤染色が創業したのが始まりです。関東大震災以降急激に増え、『本田町史』(昭和 4 年)には 6 つの工場が東立石(原)で操業をしていることがわかります。この染色業に使う反物の晒をする工場は立石に多くありました。



糊を洗い落とした反物をやぐらで干す
『葛飾区 川端南町会 創立 75 周年記念誌 会員名簿』2003 年

蓮田

昭和 10 年代の東立石の写真を見ると非常に多くの蓮田が見受けられます。現在の平和橋自動車教習所の用地も蓮田を埋め立てたものです。蓮田は、立石や青戸、上平井、宝町などで栽培が行われていたことが確認されています。

蓮根は家の周りの、排水の悪い池のような水田に作られました。生活雑排水が流れ込むような富栄養化した水田で、窒素分が多いことから稲を植えると丈が良く伸びます。そのためしめ飾りに使うミトラズという稲を蓮田のへりに植える人が多くいました。一年中水が切れない蓮田ではドジョウなどの小魚が多く、昭和 20 年代には蛍もみられました。

東立石出身の人たち

小説家の半村良さんが東立石(原)出身であることは良く知られています。半村さんは本名を清野平太郎と言い昭和 8 年(1933)に生まれました。両国高校を卒業するまで東立石で暮らし、その後キャバレーのバーテンなどの職業を転々としたあと広告代理店に勤務したのをきっかけとして文筆業にはいりました。平成 7 年(1995)に発表した『葛飾物語』には生まれ故郷である東立石の長屋の暮らしや周辺の人たちの様子などが描かれています。

漫画家のつげ義春さんは戦時中母親の実家である立石に移り住みました。たいへん貧しい家に育ち、四畳半の家に 4 人暮らしていたと語っています。半村良さんとともに立石、東立石の長屋での貧しい暮らしを活写した自伝的作品が『大場電気鍍金工業所』です。

半村さんやつげさんが体験した長屋の暮らしは今回の『何う会』でも話題になりました。六畳と三畳くらの家に 8 人が住んでいたという例もあって「どこにあれだけ大勢の人が寝るのかと思ったら足を入れ子のように組み合わせて入れて寝ていた」とお話して下さった方もおられます。こうした暮らしも葛飾区的生活史の一部であることは間違いなく、これらの人たちによって内職や工場労働が賄われ、高度経済成長を支えたことは忘れることはできません。

そのほか、東立石には浜田演芸場という演芸場が昭和 40 年ころまであって、浅香光代さんや梅澤富美男さんたちが出演したこともあるそうです。浜田演芸場については葛飾区文化財保護推進委員の石戸暉久さんが『かつしか文化財だより 76 号』に「大衆演芸を支えた濱田演芸場」というレポートを報告されています(「文化財だより」については郷土と天文の博物館までお問い合わせください)。

水神の祭り

6 月 16 日は東立石 4 丁目(川端)の水神のお祭りです。水神は区内各所、あまねくといっているほどありますが、この水神様はかつて中川のなかに祠があって、その風景が葛飾らしいこともあり昔の葛飾区史の口絵などに使われています。この水神のお祭りの前日にミヤナギと呼ばれる行事が行われます。これは旧川端村の旧家の人たちが寄り集まって水神の鳥居のしめ縄を作りかえるものです。かつては川端地区にも水田が多く、

地元の藁を使っていましたが、近年は藁の調達がたいへんです。このしめ縄はちょっと独特で、稲わらを粗くよりあげます。ちょっと蛇のような形をしています。わが国の神話では蛇は水神の使いとされているケースが多いので、あるいは昔はもともと蛇の形を作ったものかもしれません。



川端の水神の例祭
『葛飾区 川端南町会 創立 75 周年記念誌 会員名簿』2003 年

稲荷祭り

東立石 4 丁目(旧原)の稲荷神社は、秋のお祭りのほかに現在も初午に昔ながらの稲荷祭りを行っています。稲荷神は農家や商売繁盛の神様として知られていて、初午のときは各家の屋敷神として祀られている稲荷様に油揚げや赤飯や甘酒を供えることが昭和 40 年代まではよく見られました。

原では村の鎮守として稲荷神を祀っていることもあって今も初午祭りが盛んに行われているようです。伝承では元禄 8 年(1695)立石村から分村して原村が出来た時に稲荷神を勧請したものだといわれています。参拝に来た子供たちにはお菓子を配ります。売店も出して楽しい一日を過ごします。

原稲荷神社のお祭りは初午とは別に、9 月 15 日(現在は直近の土日)に行われます。大祭にはおみこしが出るほか、宵宮には面白い言葉を書いた地口行灯が境内に飾られます。